大江健三郎における中国

――一九六〇年中国旅行をめぐって――

王　新新

はじめに

大江健三郎の作品世界には中国人が全く表象されておらず、中国文学との影響関係もほとんど見つからない。これが原因か、日本においても中国においても、「大江健三郎と中国」というのが、一つの研究課題となって十分に重視されてはいない。大江研究においてほとんど注目されていないこの点に着目して、価値のあるものを見出そうというのが、本稿の出発点となっている。

初期創作活動の過程において見れば、「奇妙な仕事」や「死者の奢り」、「飼育」や「人間の羊」などを以って〈監禁された状態〉[1]における無気力で絶望した戦後日本の青年を描いた大江健三郎は、一九五九年に「われらの時代」、「青年の汚名」を以って、監禁された状態との対決を図る人物を造型することによって創作方法の転換を試みたが、いずれも失敗視された。このような状況の中で、一九六〇年五月三〇日[2]から約一ヶ月の間、大江健三郎は第三次日本文学代表団の団員の一人として、野間宏、竹内実、亀井勝一郎、開高健、松岡洋子、白土吾夫らとともに中国を訪問した。

今度の中国旅行は、大江健三郎自筆年譜[3]に記されている最初の外国旅行である。大江健三郎計三回の中国旅行のうち、一九六〇年の中国旅行が、最も時間が長く、また接触範囲も広く、感銘も深かったため、本人にも重要視されている[4]。この約一ヶ月の中国旅行はいささかも表象されはしなかったし、旅行中にあったことや出会った人物が、その後もずっと小説化されはしなかった。しかし、大江健三郎の創作活動の全局を考えると、この一九六〇年の中国旅行はかなり重要な出来事であるとわかる。この中国旅行が、大江健三郎にいかなる中国認識・日本認識を持たせ、そして彼にいかなる影響を及ぼしていたのか。本稿は、一九六〇年訪中前後の小説やエッセ

イ、言説に見られる当時大江健三郎の中国と日本に対する捉え方、そして、大江健三郎の初期創作活動における中国旅行の意味づけ、位置づけについて考察していきたい。

一　〈現実生活〉の発見

一九六〇年五月、中・短編集『孤独な青年の休暇』が刊行された。作品の全体構造が「破綻して」「失敗作」[5]と評されているが、自筆年譜[6]の一九六〇年の項には、「『われらの時代』（一九五九）以後、私は自分自身をきわめて内的な意味で束縛し強制し、次の一連の方法的な試みという性質のつよい中・短編を書いた。新潮社刊『孤独な青年の休暇』（翌年五月）（今年五月の誤り――筆者注）におさめたものであって、それらすべてのテーマは、現実から疎外された青年をえがくことであった」と記されていることからみると、この中・短編集も『われらの時代』の延長線上にあるといえる。しかし、作品を読んでいくと、どこか違う印象を受けるように思う。

その中の短編の一つである「孤独な青年の休暇」の主人公の〈私〉は男に襲われて逃げたが、途中で意識を失い、目が覚めると、自分が倉庫の中にいると分かる。自分が同性愛者に殺され、海に投棄されたと夕方の新聞で読んだ時、「一週間でいい、このまま死んでいよう、自分自身を日常生活の束縛から保釈するのだ。死んでしまって人間、無名の非存在として自由に、解放されて一週間を過ごすのだ」と思った。〈日常生活の束縛〉から脱出すると、〈自由〉と〈解放〉が得られるが、その条件は、〈無名の非存在〉としてである。「透明人間の自由感、解放感を享受しながら、しかも濃密に自己の肉体および精神の存在感を味わいながらスラム街を歩いていた」〈私〉は、かつての現実生活から消失することによって、もう一つの現実生活に入ることができたといえる。即ち、〈現実に疎外された〉主人公に、現実生活に回復する機会が訪れるのである。

「孤独な青年の休暇」のあと、長編『遅れてきた青年』（一九六一―一九六二）や短編「セヴンティーン」・「政治少年死す」（一九六一・一）も同じく〈性的人間〉を取り上げたが、以前の作品と異なるタイプ、つまり〈安逸〉や〈退嬰〉と異なるような性格の人物を描いている。『遅れてきた青年』の〈わたし〉や「セヴンティーン」、「政治少年死す」の〈おれ〉は、いずれも攻撃性や権力への意志を持った人であり、こうした大江自身の「政治的人間」と「性的人間」という二分法の分類には当てはまらない人物は、これまでの主人公にはあまりみられなかった。換言すると、「孤独な青年の休暇」とそれ以降の作品との間に、裂け目が入っている。もし、大江が「孤独な青年の休暇」とそれ以降の作品との間で方法と主題の転換を行ったとすれば、その転換のきっかけとなったのは何で

あろうか。

国際的情勢からみると、「孤独な青年の休暇」が発表された一九六〇年前後は、世界的範囲にわたる平和・反戦運動が盛んに行なわれ、いわゆる第三世界であるアジアやアフリカ諸国が民族解放運動を展開し、植民地の状態から独立を獲得していく時期であった。日本国内でいえば、この民族独立運動の波を受け、反安保条約改定の闘争が甚だしい勢いで行われていた時期である。前年三月に安保改定阻止国民会議が結成され、まもなくそれが大衆運動へと広がり、一一月に作家・芸術家・ジャーナリストたちが「安保批判の会」を成立した。大江健三郎も一九六〇年安保闘争のなかで、進歩的な文化人を中心とする「安保批判の会」と「若い日本の会」に参加し、安保条約改定阻止のために、政治的意思表明をし、活動していた。そして五月に、大江は日本文学代表団の一員として中国を訪れたのである。

大江は鶴見俊輔との対談で、大学に入学して、代々木の日本共産党の本部にひるがえる赤旗を見て、一種の解放感を味わったと回想した[7]ことからみると、当時の大江は共産党に一種の親近感を持っていたといっていいようである。一九六〇年に最初の海外訪問で共産党国家の中国に行き、帰国してまもなく、共産党系の新日本文学会に入会したことが、中国訪問の影響のもっとも端的な現れであろう。大江の共産党系へある程度傾倒していたことはともかくとして、彼が日本青年の対社会意識・対現実意識の変化に気づくのは、おそらく中国訪問を終えて帰国してからのことである。

一九六〇年四月の末頃から、中国では『人民日報』をはじめとする各大新聞社が、日米安保問題をめぐる日本人の動きを報道し始めた。『人民日報』を例にしてみれば、必ず一日八面のうち、一面か二面程度で日本のストライキを生き生きと報道したり、四日か五日ごとに社説を一編出したりしていた。このような折に、夏の「北京のホテルで、たちまち乾燥してしまう汗をたえまなく流しながら、『人民日報』を読ん」[8]だ大江が、「現在から未来にむかうベクトルのはっきり正面にでているアクチュアルな歴史観が、いかに日本の政治問題をあざやかにとらえるか、ということに最も興奮させられていた」[9]のも理解できるであろう。『人民日報』という外国メディアによって報道された自国で行なわれている民衆運動に関する情報を大江がやや情緒的に受けとめていたおそれもあるが、このような高揚感に、大江が何を見つけたのかは、ここで注目されるべきことではなかろうか。

『孤独な青年の休暇』の「後記」に、「自分は現実から疎外されている青年作家にすぎず、真の作家とは、逆に参加するものだとすれば、自分は誤謬をおかしているのではないか」という自覚があったことを思いあわせると、訪中後に書いたこ

の「強権に確執をかもす志」というエッセイには、「安保闘争をつうじてはじめて現実生活にふれた」という作家自身の正直な告白があるように、このきっかけで、大江が現実感覚を養成し始めたようである。つまり、大江が「日本の青年は、というような一般的総括はやはり政治を現実生活の外で客観的に見る種族の方法だろう」[10]という認識を持ち始めたとき、〈現実から疎外された青年〉という命題の影は、次第に薄くなっていく。

訪中帰国後の創作を見てみれば、大江のこうした「転向」が目に付く。一九六〇年一〇月、浅沼社会党委員長が講演中に右翼青年に刺殺される事件がおこり、大江はこの事件をモデルに、セヴンティーンの〈政治少年〉がテロリストへ変身するまでのプロセスを描いた「セヴンティーン」およびその第二部「政治少年死す」を発表した。同じころ、大江は創作のほか、大量のエッセイやルポルタージュ、紀行文も発表した。そのエッセイの多くは全エッセイ集『厳粛な綱渡り』、ルポルタージュと紀行文の多くは、『世界の若者たち』、『ヨーロッパの声・僕自身の声』に収録されている。そして、大江が自身の文学世界をこのように開拓した理由に、中国訪問を経て自己の「閉鎖的で室内的な性格をつくりかえる」[11]必要を感じたことがあげられる。

以上をまとめてみれば分かるように、〈現実生活〉が欠如していると自覚した大江が、安保闘争と中国訪問によって、一般の日本人及び中国人民に対して、ある期待感を持つようになり、そしてこれによって、〈現実生活〉への連帯感を感じ取るようになった。こうしてみると、一九六〇年の安保闘争と中国旅行が、大江に作風の転換を促したということは、無視できないといえよう。

二　〈誇り〉の発見

初期作品における大江健三郎の中心的テーマは〈監禁された状態〉であることは、作家自身もそう自評している[12]ため、既に定評となっている。この一連の作品のなかで、大江健三郎は、行動と無為の対立の中で、無為しか選択し得ない青年に焦点を当て、日本の青年は〈見るだけで跳べない〉無気力な若者たちであるというように世代設定をした。この無気力なイメージについて、大江健三郎は自身のエッセイで「ぼくら日本の若い人間たちが、あいまいで執拗な壁にとじこめられてしまっているというイメージ、ぼくらのあいだには真に人間的な連帯感はなく、ざらざらした毛皮をおしつけあってほえる犬たちのように、ただ体をからませあっているだけだというイメージ」[13]であると解釈しているところから分かるように、初期創作活動における大江健三郎にとっての〈戦後〉とは、〈壁〉に〈監禁された状態〉であった。

大江健三郎の初期作品において、〈僕ら〉、〈僕ら日本の青年〉というような言葉が多用され、主人公たちは〈僕〉ではなく、しばしば〈僕ら〉という世代の名のもとで発言する。大江健三郎は作品のなかで、〈僕〉や靖男などという個人に、〈現代日本の青年〉という世代の象徴を託し、個人的な無為を社会的現象として、あるいは若い世代全体に共通した問題として捉え、個人から普遍・一般へと問題を押し上げる中で、〈われらの時代〉というのは絶望と行動不能の時代であると把握したことは、既に多くの研究者によって論じられてきた。要するに、一九五〇年代の日本の〈監禁された〉という時代状況が、〈僕ら〉の世代を無気力にさせてしまったというのが、当時の大江健三郎作品のモチーフといえる。このような〈壁〉によって日本人が〈監禁され〉ている状況を、大江健三郎が青年（学生）の造型を通じて描いた。

しかし、ことはここに留まっているのではない。大江健三郎は、ごく個人的なテーマを社会的なテーマへと押し上げただけではなく、更にこの青年一般の特徴を、特殊な時代的意義にまで昇華させ、国際政治的状況にまで結びつけたのである。

「現代日本は、性的人間の国家と化し、強大な牡アメリカの従属者として屈服し安逸を享楽している……」[14]という認識をえた時から、大江健三郎の視線は国家独立をはじめとする政治的なことに向き始めたといえる。一九六〇年の中国旅行によって、このような時代認識が、より一層確認され、深化された。

私は頽廃した無気力な青年をえがくことで文学的出発をしました。私は、現代日本の青年の最も典型的なパターンとしてそれをえがいてきました。（中略）それが日本の現実だと思えたからです。そして中国をおとずれた私が理解したのは、たとえばかつて外国人の足の下で泥にまみれていた上海の青年が、いまやいかに希望にみちているかを見て理解したのは、こういう日本の青春の頽廃が、外国軍の日本駐留に本質的に原因している、ということです。私はたびたび、日本にいる外国人との関係においてこういう青年をえがきだしましたが、それは正しかったと思います。[15]

当時中国外交部長の陳毅将軍に会って、いままでの自分の創作について、また自国である日本の状況的・時代的認識について、大江健三郎は以上のように述べた。「日本の青春の頽廃が、外国軍の日本駐留に本質的に原因している」という認識を得たのは、「中国をおとずれ」、「かつて外国人の足の下で泥にまみれていた上海の青年が、いまやいかに希望にみちて

いるかを見」たことをきっかけとしているのである。このきっかけで、自分の時代的把握が「正しかった」とも確認できた。植民地・半植民地の状態のもとから解放された中国は、真の独立した国家の代名詞として大江健三郎に記号化されたのである。つまり、〈あの健全なる中国〉は、いかにもアメリカ占領軍の支配下にあった日本とは対照的な存在として、大江健三郎の目に映っている。更にこの対照的存在によって、「私自身の内部でも、日本で自分が不健全な青年たちをえがいてきたのはまちがいでなかったという確信が育ってきたのであった。確かに〈あの健全なる中国〉で、私はその確信をかみしめる機会をえたのである」[16]とするのである。

一九六〇年七月九日一ツ橋学士会館で行われた日本文学代表団の歓迎報告会で、大江健三郎は、「たしかに中国の青年は、日本の青年にないものを持っているということを非常に強く感じました」[17]といって、独立を成し遂げた中国の青年と日本の青年とは違う、そして中国の青年にあるものが「日本の青年にない」と実感している。しかしこの、中国の青年にあるが日本の青年にないものとはいったい何であろうか。大江健三郎が帰国後に書いた「戦後青年の日本復帰」に、このような感想が述べられている。「私は中国の青年が、中国のなかで、中国にその関心の中心をおきながら、中国人として誇りとともに生きているのを見た。（中略）日本の青年は、日本の土のうえに生きることを誇りにしているか？していない、と私は思う。日本の青年は、日本人であることに誇りを感じているか？そうでない、と私は思う」[18]と。

北京で大江健三郎はコンゴの青年や中国の青年と出会って、彼らから受けた印象をこのエッセイに記した。このような出会いによって、大江健三郎は中国で受けたコンゴや中国の青年たちの印象と比較しつつ、日本の青年を振り返った。ここでは特に〈誇り〉という言葉が目につく。中国の青年にあるが日本の青年にはないものは、他ではなく、この〈誇り〉というものである。つまり、中国の青年は「中国人として誇りとともに生きている」が、日本の青年たちは、日本という土地に生きることを誇りにしていないし、日本人であることにも誇りを感じていない。これが、大江健三郎が中国旅行を経てから捉えた日本青年像・日本社会像であった。

ゆえに大江はそれまでの小説の中で無気力な日本青年を描いてきた。当時日本の特質的状況である〈監禁された状態〉が、日本青年にこの〈無気力〉という特質を与えたのである。この根源となるものは、アメリカ占領である。つまり、戦争は終わったが、アメリカ占領軍の支配の下で日常生活を送ることになっているからこそ、希望を持てず、「誇りを感じていない」ことになる。〈誇り〉というものは、人間存在の基盤となるものであり、またすべての行動の基礎となるものである。中

国が徹底的に長年の植民地・半植民地時代から脱出し、独立自主を獲得したため、中国人がみな強烈な民族独立意識・民族的誇りを持っているのに対し、日本はまだアメリカ占領下にあるため、独立した民族的誇りもない。〈誇り〉がないと、自然に、希望も見えてこず、無気力になる。このように大江健三郎の日本人観を追求するのはある程度妥当なものと思われるのである。

この独立・自立に由来する〈誇り〉の発見は、すぐさま、大江の作品に投影された。一九六一年一月『小説中央公論』に発表された短編小説「幸福な若いギリアク人」においては、〈誇り〉が存立の基本として表象された。この小説において、大江は、自分を日本人だと思い込んだ青年が、自分がギリアク人というまったく知らなかった民族に属することを知らされ、自分のアイデンティティを確立していくプロセスを描いた。多民族問題の角度からこの小説を取り上げるのはもちろんすばらしい視角であるが、注目してほしいのは、次の点である。

この作品では、青年が自分がギリアク人であると知り、このことが日本人に知られたら「獣」やら「犯罪者」やら「障害者」に思われるだろうと想像して、戸惑うが、民族のシャーマンの示唆を受け、意識転換を遂げることで、「絶望的不幸」から立ち直り、「幸福感」を抱くようになる。「老人は（中略）自分がギリアク人のシャーマンであることをも誇りにみちて話すのだ」[20]。つまり、誇りを持っているシャーマンと出会い、自分の民族が自立した存在として日本に暮らしているのだという〈誇り〉こそが、青年に自分がギリアク人であると心から認めさせた支えとなるものである。表面的に見れば、この小説は中国とまったく関係のない文脈で書かれたと思われるかもしれない。しかし、この〈誇り〉の強調は、中国訪問による発見された〈誇り〉の大切さとは無関係ではない。言うなれば、この小説は〈誇り〉の発見の開花であるともいえるであろう。こうしてみれば、中国旅行によって獲得した日本の青年が日本に「誇りを感じていない」という認識は、以前より一歩進んだ深みのある認識であるといえよう。

三　〈作家としての方向性〉の発見

「「死者の奢り」など初期の作品においては、その停滞と閉塞を破りだそうとして、理念なり価値なりを叫びだしていない。（中略）『われらの時代』以後の諸作において、大江は理念なり価値なりを叫びだそうとして、いずれも失敗に終わっているのだ」[21]と、松本健一氏は述べている。しかし、作品を繰りかえし読んでいくと、明瞭な叫び声がこそ聞こえなかったものの、呻き声以外に、日本人に注意を呼びかける声がかすかに聞こえてくるのである。

「今後（第一創作集の後――筆者注）の仕事でも、ぼくもや

はりあいまいな閉ざされた状況にいる人間を書きたいと思う。（中略）そしてぼくはそういう要素がファシズムとむすびつきはじめる、芽の部分を摘発したいと考える」[22]と、第一短編集『死者の奢り』の刊行に際して、大江健三郎が述べている。この「あいまいな状況」をファシズムと結びつけている点が興味深い。これについて、同じエッセイにはこう書いてある。「あいまいに閉ざされているために、しだいにリアリスチックな判断力や分析力が衰退したあげく、持続的なエネルギーもうしなって怒りっぽく非論理的になった若い精神の行きつくところは、おおかれ少なかれファシズムにつながる」[23]。人間を閉ざす壁をファシズムと結びつける論理が、大江健三郎の閉ざされた状況についての認識であり、問題意識でもある。つまり、当時の日本の青年が「判断力や分析力が衰退した」「持続的なエネルギーもうしなって怒りっぽく非論理的になった若い精神」の持ち主であるという認識には、作家としての敏感さがあり、憂慮があるといえよう。

第二短編集『見るまえに跳べ』（一九五八）の後記に「私はこの創作集におさめた作品をつうじて一つの主題を展開したいと考えました。強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にいる日本人、それにその中間者としての存在（外国人相手の娼婦や通訳など）、この三者の相関をえがくことが、すべての作品においてくりかえされた主題でした」[24]と書き、戦後をむしろ屈辱的な占領体験であると捉えた大江健三郎は、このような敏感さと憂慮を持って、一九六〇年の安保闘争に参加したのであるといえる。民主主義にあれほど憧れた大江は日本の現実・現状に大いに不満を感じ、それを打ち破ろうとして試みているうちに、安保闘争の最中の中国旅行が、ある程度大江健三郎に自信を持たせ、信念を固めさせ、彼の進むべき方向をはっきりとさせたのであった。

安保闘争開始後、中国各地では大規模な応援活動が行なわれた。『人民日報』によれば、五月一六日まで、全国の三十三の都市の計千二百万人が、日本の反米運動を応援するデモに参加したという。また第三次日本文学代表団の上海訪問が、ちょうど上海の反米宣伝週間と重なったこともあり、大いに歓迎された。六月二五日、毛沢東、周恩来は上海で代表団を会見した際、毛沢東は「日本の独立と自由は希望のあるものだ」[25]と述べている。大江は中国で、中国人民の反米振りや、安保闘争が中国の政治家に高く評価され、中国民衆に大いに支持されたのをこの目で見て、『世界文学』に「新しい希望の声」（六月一一日）、『人民日報』に「日本人民の名義で」（六月二六日）を掲載し、中国人民の支持への感謝の意とこれからの闘争への展望を見せた。三回も繰り返された「日本人の心に希望を喚起しよう！現在、このような希望はもう消滅されることができない。日本人の心に希望を喚起しようよ！」[26]とい

うような文句や、「遠くない未来、必ずこんな日が参ってくる――日本人民共和国の旗が、中国人民共和国の旗といっしょに翻る日が！このような日はもう遠くない。このような未来はもう明日と同じように近づいてきた。これが今度の中国旅行と日本の闘争から得た結論である」[27]というような言説はや情緒的にも見えるが、日本人に希望を喚起しようとする意識・未来に対する希望を取り戻した興奮が明らかに示されている。

「中国への旅は、（中略）また、ぼくひとりでの、はじめてのヨーロッパへの旅は、ぼくに、自分が泥濘のなかを、しゃにむに歩いてゆく（あるいは走ってゆく）ようにして、つづけてきた、作家としての生活の最初の数年を、茫然と、内省的な気分で、ふりかえらせるものでもあった。（中略）ぼくが生涯にわたって担いつづけるであろうところの、まことに多くのことどもが、あの中国旅行を契機として、ぼくに始まったのを、あらためて思うのである」[28]。ここに、中国旅行による大江の内省の姿が容易に読み取れる。帰国後に発表したエッセイ「強権に確執をかもす志」に、こんな一節があった。「一九六〇年夏に日本を揺りうごかしたものは、教育の側面からいえば、デモクラシー精神の抵抗的、反逆的要素を学生たちの心に加える仕事をしたといっていいと思う。日本の読者と作家の両者をひっくるめて、いまはじめて現実的に、デモクラシー文学の畑はひらかれたのではあるまいか？」と。ここには、安保闘争に多大な意義を見つけ、戦後を見直すようになった姿勢、デモクラシー文学への注目がみえる。

現実から疎外されている青年ばかり描いたというそれまでの姿勢を反省する上で、それをつくりかえようとした大江は、書斎に閉じこもるだけではなく、「一人の作家として、現実生活のがわから政治をうけとめる人間の声でかたるほかはないのだ」[29]という、現実に参加すること、政治を受け止めることによって作家としての役割を果たしていこうと覚悟していた。アジア・アフリカ諸国の文化人の交流を目指した「アジア・アフリカ作家会議」一九六一年東京大会の参加にも、積極的に現実参加を図る大江の姿が見られる。これは、作家でありながら安保闘争に参加した自分への自己肯定でもあろうし、またこれからの創作活動において現実参加・政治参加を作家の使命として受けとめていこうとする自己規定でもあろう。つまり、戦後の民主主義教育を受けた大江は、戦後を忘れ、時代風潮に身を任せてしまう多くの人々に民主主義の希望を喚起し、〈強権に確執をかもす志〉を訴えつづけることが、民主主義の実現を目標とする作家の論理であると考えたのである。

こうしてみると、大江の民主主義に対する考え方が六〇年安保闘争の経験と中国訪問によって突然形成されたのではない。しかし、人々に民主主義の精神とは「抵抗的・反逆的要

素」であると教えた大江が、自らの戦後観、即ち戦後民主主義思想をより明確に固めていったのは、六〇年安保闘争の経験と中国訪問を経てからであったといえよう。ここに大江は六〇年安保闘争の経験と中国訪問によって、自らの作家的方向性の一つを決意したと考えることができるのである。

おわりに

以上、一九六〇年大江健三郎の中国旅行を、訪中前後の小説やエッセイ、言説と照らし合わせながら考察した。このように、この中国旅行は大江健三郎に大きな影響を及ぼした。結論として、以下の三点を強調しておきたい。まず、一九六〇年訪中の際、大江健三郎は、中国の専ら政治的な面にのみ着眼し、真の独立を成し遂げた国家として、アメリカ占領下の日本とは対照的な存在として捉えた。このようにして、中国はある程度大江によって理想化されたとも言える。大江はこの〈健全なる中国〉の政治や中国における政治と文学との関係について、相当好感を示し、傾倒を見せた。また、大江健三郎はこの中国旅行を通じて、日本・日本人のことそして彼自身のことについて振り返って見、反省する真新しい視角を得て、自分の日本認識・自己認識を深化させただけでなく、異文化導入により他者性を摂取する意欲を示した。さらに、一九六〇年の中国旅行によって、大江健三郎は中国政治や文学のあり方から大きな示唆を受け、励まされ、自分の文学を政治（社会現実）に結びつける方向を固めた、ということができよう。

周知の如く、サルトルは『嘔吐』などにおいて、人間の生そのものの無意味さを表現した。彼は第二次世界大戦で反ナチス人民戦線に参加したことによって、アンガージュマンの意義を見つけ、コミットメントに意味を与えたのである。そのサルトルに深く影響された大江健三郎が、実存主義のこの変化を知らないはずがないであろうと思われる。しかし、大江の場合は、どのようにアンガージュするかを「見るまえに跳べ」や「われらの時代」などを通じて模索していくうちに、中国からの刺激を受け、戦後日本青年の生の空虚さをアンガージュできないと考え、ゆえに「一人の作家として、現実生活のがわから政治をうけとめる人間の声でかたる」[30]ことによってアンガージュしていこうと自己規定したのである。

「決して明るい心をいだいて中国へ出発するわけでは」[31]なかった大江健三郎は、「中国で自分自身の文学観、また未来像のもち方について有効な体験をする」[32]ことになった。少なくとも、孤独な青年作家を外部世界へ解き放つ契機となったのは、ほかならぬ中国旅行であった。この点から見ても、一九六〇年の中国旅行は大江健三郎にとって、ある意味では、活力を与えられた、あるいは方向付けを見出した旅行であるともいえ

よう。一九六〇年というのは、日本歴史の転換点であり、大江健三郎の文学活動の転換点でもある。これにかんがみ、大江健三郎の一九六〇年中国旅行は、一作家の展開にかかわる課題として、実に注目されるべき出来事であると考えられるのである。

註

(1)大江健三郎は第一短編創作集『死者の奢り』(文芸春秋新社、一九五八年三月)の「後記」において、「僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした」と書いている。この〈監禁された状態〉は具体的にいえば、檻の中の犬(「奇妙な仕事」)、カリエス病棟(「他人の足」)、学生寮(「偽証の時」)、穴倉(「飼育」)、バスの中(「人間の羊」)、少年院(「鳩」)などに反映されている。

(2)大江健三郎自筆年譜(『大江健三郎全作品1』所収、新潮社、一九六六年六月)においては「六月、中華人民共和国に旅行する」と書かれている。

(3)『大江健三郎全作品1』所収、新潮社、一九六六年六月。

(4)一九六〇年七月九日、中国を訪問した日本文学代表団の歓迎報告会が、一ツ橋学士会館で行われ、大江健三郎も今度の中国旅行について報告し、「この旅行は私にとって非常に意味深かったと思います。中国で私はそう思いましたし、日本に帰った今も、強くそう思います。この考えを今後も持ちつづけようと思います」。「中国で私は非常に多くのものを学んだと思いますが、いかに多くのものを学んだかについては、これから考えていかなければならない」と述べた。『文学』一九六〇年八月号が、「日本と中国――中国訪問文学者歓迎報告会より――」の題の下で、その中の四氏の報告を掲載した。大江健三郎の報告は「明るい眼のデモクラートを」というタイトルであった。

そして、十年後に長編小説『遅れて来た青年』が新潮文庫から刊行された時、大江は「『遅れて来た青年』とぼく自身」(『遅れて来た青年』新潮社一九七〇年一一月)においても、「ぼくの個人的な歴史にとって、中国への旅は、きわめて意味の深いものであった」としている。

(5)山本健吉の奥野信太郎・山本健吉・佐藤朔「創作合評」(『群像』一九六〇年五月号)における発言による。

(6)『新鋭文学叢書12　大江健三郎集』(筑摩書房、一九六〇年六月)所収。

(7)「戦後民主主義は放棄されねばならないか」、『思想の科学』一九六九年五月号。

(8)大江健三郎「強権に確執をかもす志」、『世界』一九六一年七月号。

(9)同上。

(10)同上。

(11)『世界の若者たち』(新潮社、一九六二年八月)「後記」。
(12)注(1)を参照。
(13)「徒弟修業中の作家」、大江健三郎『厳粛な綱渡り』(文芸春秋社一九六五年三月)所収、四〇頁。初出(『朝日新聞』一九五八年二月二日)未見。
(14)「われらの性の世界」、大江健三郎『厳粛な綱渡り』(文芸春秋社一九六五年三月)所収、二三四頁。初出(『群像』一九五九年一二月)未見。
(15)大江健三郎「孤独な青年の中国旅行」、『文芸春秋』一九六〇年九月号。
(16)同上。
(17)大江健三郎「明るい眼のデモクラートを」、『文学』「日本と中国——中国訪問文学者歓迎報告会より——」、一九六〇年八月号。注(2)を参照。
(18)大江健三郎「戦後青年の日本復帰」、傍点原文、『中央公論』一九六〇年九月号。
(19)趙美京氏の論文「現代文学の課題としての多民族社会」を参照。筑波大学文化批評研究会『多文化社会における〈翻訳〉』(二〇〇〇年六月)所収。
(20)『大江健三郎全作品1』(新潮社、一九六六年六月)二五四頁。
(21)松本健一「『死者の奢り』——監禁された青春」、『現代の眼』一九七九年一〇月号。
(22)「徒弟修業中の作家」、大江健三郎『厳粛な綱渡り』(文芸春秋社一九六五年三月)所収、四一—四二頁。初出(『朝日新聞』一九五八年二月二日)未見。
(23)同上、四〇頁。
(24)新潮社、一九五八年一〇月。二五一頁。
(25)『人民日報』一九六〇年六月二五日。
(26)『世界文学』一九六〇年六月。
(27)『人民日報』一九六〇年六月二六日。
(28)「『遅れて来た青年』とぼく自身」、大江健三郎『遅れて来た青年』(新潮社一九七〇年一一月)四八一—四八二頁。
(29)大江健三郎「強権に確執をかもす志」、『世界』一九六一年七月号。
(30)前出。同注(21)。
(31)大江健三郎「孤独な青年の中国旅行」、『文芸春秋』一九六〇年九月号。
(32)同上。